

culars のことで、IAU Circulars はもともと、新しく発見された太陽系の天体や新星についての情報交換を目的としたものであったが、最近になって X 線天体など、各種の天体の情報についても使われるようになっている。そこで、このような新しい天体の情報交換についてどうするかを、Circular の発行者である、IAU 天文電報中央局と関係者とで協議した結果、次のようなことで解決することになった。すなわち、光学観測でないデータや、光学観測でも、彗星、特異小惑星、衛星、新星、超新星の発見以外のものについては、一件について 25 ドルと一行について 7.5 ドルのけいさい料をとることになり、これはすでに行なわれている。

また、従来から、小惑星の命名権は発見者にあるとされてきたが、あいまいな点もあったので、次のような決

議がされた。すなわち、発見者は、番号がついて登録された小惑星の名前を提案することが許される。そして、この提案は一般的には認められる。そして、MPC(小惑星関係の IAU の Circulars) に、その説明がのって正式な名前となる。小惑星の発見とは、同定のために使われる軌道決定のための、最初の出現時のものであり、2人の発見者のいる時は、報告の先の人をとる。また、登録時に発見者のなくなっている場合には、また、登録されてから 10 年命名されない場合には、同定を行なった者、2番目の出現以降の発見者、軌道決定に重要な貢献をした観測を行なった者、発見者のいた天文台の代表者によって名前が提案される。そして、IAU の第 20 委員会の委員長、副委員長、小惑星中央局長からなる委員会で名前を決める。

## IAU シンポジウム No. 87 と IAU 総会に出席して

鈴木 博子\*

モントリオールの天気が悪く、予定よりも 4 時間も遅れやっと間に合った最終バスで会場についたのはあと 30 分もすれば 8 月 6 日になる頃である。IAU シンポジウム No. 87 の会場モン・トランプランはモントリオールから約 130 km 北方のローレンシャー山脈の山であり、またそのふもとにできたリゾート地の名前もある。期間は 8 月 6 日(月)から 8 月 11 日(金)まで、カナダの国立科学研究所(NRC) のヘルツベルグ天体物理研究所(HIA) がホストとなって開かれる。メインロッジではもうレセプションも終りの雰囲気、その中で登録の行列に並ぶ。ここでまず一騒動。なんと私は女性とそれまで思われてなくて(宿泊希望の質問状には男女をたずねる欄があり、ちゃんと女性にマルをつけて送っていたのに!),他の日本人達(電通大の中川、坂田両氏、東京天文台の福井氏)と同室に割当てられていたのである。宿舎及び会場となったモン・トランプラン・ロッジは 2 つのロッジと数十個のカッテジで出席者約 190 人とその家族が泊れた事を考えると約 300 人の収容能力があり、日本で言えば八王子大学セミナー・ハウスの宿泊設備を良くし、プール、テニス・コート、チャペル、山と湖、きれいな空と空気とおいしいフランス料理をつけ加えた様な所である。満室に近い状況の中で幸い組織委員長のタウンズ氏夫妻のコテッジにバス付小部屋があいており、そこに入る事になったが、おかげでタウンズ氏は 2 日目からモーニング・コールを遠慮された様子、どちらも気を使うはめになった。同室になりそこねた人々以外では東京天文台の森本氏は組織委員なので一室占居、シ

カゴからかけつけた空電研の渡辺氏は御家族同伴なのでカッテジに入られた様子である。たった 6 人の日本の出席者とはさびしい限りで、運営委員会も 1 カ月前に日本人にはもう一度出席をうながすテレックスを打ったと聞く、それがなければ 4 名の所であった。論文で名前だけ知っていた多くの人々がお互いに知り合いであるのを見るにつけ、遠隔地にいるハンディキャップを感じずにはいられない。

月曜から金曜まで、晚餐会のある木曜日を除き 1 日に 2 つづつのセッションが開かれた。午前は 8:30~12:00、もう一つのセッションはその日の天気と参加者の希望を聞いて午後 2:00 からまたは夜 8:30 からという事になつており、結局月、金が午後に、火、木が夜になった。それだけ遊びたい人が多かった事になる。1 つのセッションは 2, 3 の招待講演(レビューではあるが、実際に仕事をしてきた人の話)と一般講演が 5, 6 あり、もちろんそれだけでは全部はとても消化できないので別に会場のとなりにポスター会場(ふだんはたぶんラウンジ・バー)が設けられ、24 時間交代で 4 サイクル、1 回に十数枚のポスター発表があった。セッションにタイトルがついていないので紹介しづらいのだが、大体次の様なテーマに別れていた。

- I 一般的な観測のまとめと進展(特にサブミリ)
- II 星のまわりの分子——観測と理論、分光と星間分子
- III 直線分子の観測(特に TMC-1), イオン-分子反応の実験, LMR 実験等
- IV 分子生成の理論——高密度雲、うすい雲、星のま

\* 京大理 Hiroko Suzuki:

わり

- V 同位元素比——観測とその解釈（森本氏が議長）
- VI 星間雲、星のまわりの雲の観測とモデル
- VII 銀河の分子雲分布、ショックと星の形成
- VIII テーブル・ディスカッション
- IX メーザー、観測のまとめと励起の理論

すぐわかる様に総花的なプログラムであるが、これはIAUシンポジウムの性格上仕方のない所なのだろう。何しろ「星間分子」というタイトルで、比較的便利な所で、しかもIAU総会の直前のシンポジウムなのだから、最初は400人もの出席希望者があったというのも信じられる。論文も100編は越えていると思われる。いったい集録ではどの様にまとまるのだろうか。とまれ出席者の豪華な顔ぶれ(4人のノーベル賞受賞者を含む)からして充実した、最新の研究を盛った物になる事は間違いない。私の印象を言えば、星間分子観測もいよいよ広く深く多様になり、天体観測の手段として定着した様である。しばらく前までは研究会等があるたびに新しい分子の発見を聞き生成の理論とのギャップが広がるのを嘆いたものだが、多少の事では驚かない最近になって新しい分子の発見を聞く事がまれになった。今回も耳新しいのは光での $\text{CH}_2$ 、UVでの $\text{H}_2\text{O}$ のみで、電波では現在 $\text{HC}_{11}\text{N}$ とリング状分子が探索中との事である。ヘルツベルグが $\text{H}_3^*$ の光の放出で $\text{H}_3^+$ を間接的に( $\text{H}_3^+ + \text{e}$ の再結合線として)観測するという話をしていたのも興味をひいた。

会場は全く外界から孤立したリゾート地で、参加者の親睦には申し分なかった。特に良かったのは食堂が1つなので私の様な一人者は朝昼晩いつもだれか(anyone)と相席になり、いや応なしに友達になれる事である。しかし何しろ多人数だからだれか(someone)をつかまえるのは容易ではない。3日も午後が自由だったのだが遊ぶ所が多すぎるとも良し悪しで皆どこかへ消えてしまう。やっと最終日につかまえた人に「ポスターご覧になりましたか」と聞くと、「いや忙しくて……」とのたまう。しかし私は彼がゴルフで忙しかった事を知っているのである。ジョッギング競走の伴走車から見たのだから。夜の部も12時頃セッションが終るのをバーでバンドが待っているという所なので講演中お休みの人もよくみかけた(自分の事?)。晚餐会では森本氏のスピーチが非常に評判よろしく、後になって私にまであれはよかったと話しかけてくる人が何人かいた、英語で生きるジョークなので紹介する才のないのが残念である。機会があれば御本人よりお聞き下さい。晚餐会以外でも大活躍だった事も書きそえておく。

シンポジウムを終えた後、IAU総会までの3日間を利用しアルゴンキンの観測所(46m電波望遠鏡がある; ARO)とオタワのHIAを訪問した。会期中に運営委員

に申し込んだ人ばかり、渡辺、中川両氏を除く日本人と、オーストラリア人、ソ連人、フランス人、計12人の一行の小旅行となった。AROはオタワから3,4時間車で西へ行ったアルゴンキン州立公園の中にある。アルゴンキンとはインディアン部属の名前で、熊とか鹿、ムース等がうろうろしている所である。我々の見たのは鹿だけ(但し奈良公園辺りのとは生きがちがう)だが、熊による事故(食べられてしまう!)は時々あるらしい。ビーバーの巣を見、森と湖の中の日没を楽しんだ後、訪問者のための宿泊施設で一泊する。次の日、プロトン氏とタッピング氏に連れられ46mの望遠鏡を見学したのだが、残念ながら素人の悲しさ、機器の説明はほとんどわからない。ただ望遠鏡の下の建物が回路板でいっぱいなのに驚かされた。それだけ古い(1966年より稼動)わけで、現在少しづつ集積回路に置きかえているとの事である。AROはNRCが運営しているが、利用可能時間に対し観測申し込みは約1.5倍との事、これはキットピークで聞いたアメリカでの事情に比べると恵まれていると言える。その辺りが $\text{HC}_8\text{N}$ 、 $\text{HC}_7\text{N}$ 、 $\text{HC}_9\text{N}$ の一連の直線分子を発見できた一因であるとはあとで聞いた話。

オタワにもどった夜、一行は今回のシンポジウムの運営委員長のアンドリュウ氏のお宅で思いがけず夕食をごちそうになったりした。私はこの時とばかり家中をあちこち見ておいた。台所のきれいな事と男性の家事能力のある事には感心してしまう。次の日HIAを訪問、分光部と天文部を見学した。NRCは国立だが、その中でもHIAが中枢を占めるらしく、日本で言えば霞ヶ関の様な所にある。日本から行かれた岡氏はこの分光部でもう20年も研究を続けていられる。もっともHIAの形になったのは約4年前、恐らく分光部と天文部の協力で星間分子の研究の効率を上げるのも目的の1つであろう。またそれだけの成果が上がっていると言える。ここで私は一人議論をぬけ出して近衛兵と騎馬警官を見に行き(勧めた人も悪い)、帰ったらもう皆出かけた後というズッコケぶりを発揮した。面目躍如と悪口をいう人もいる。

何とかモントリオールにたどりつき、8月13日からはIAU総会である。実は総会については私は報告するのに適任でなくて、と言うのはもともと総会に出るとは決めずにカナダへ出かけたのである。ところがシンポジウムでもらった旅費補助の小切手の現金化をIAU総会の登録所でやる必要があり、またIAUからお金をもらつたのだから出席する義務があると言われたりして(どちらも誤解である事がわかったが後の祭り)結局出席する事にしたのである。ところが総会はIAUメンバーか、加盟国から推薦された人しか個人で登録する事はできない。結局森本氏の同伴者にしてもらったのだが、参加者は名札の色で区別されていて同伴者はオレンジ色、大部

分は夫人達である。男性なら申し込みの遅れた人とすぐにはわからつもらえるのだが、私は見れば女性とわかるのでだれの夫人かと思われる。その度に説明しなければならない。知らない土地でのずうずうしさで、便宜的に色々のちがう名札に変えてくれと交渉したのだがとおらなかつた。色による差別反対！

会場は招待講演が（たぶん夜なので）市の中心のホテルで行われた他はモントリオール大学である。開会式の前夜のレセプションは大学の中央会館のホールで開かれたが、まず大勢の人びっくり、人とぶつかってワインをこぼしてばかりいた。シンポジウムの出席者に出会うとなつかしく、お互にそう思うのか、あちこちでシンポジウム No. 87 組のグループが固まる。おかげでモン・トランプランでつかまえられなかつた 2, 3 の人から話を聞く事ができたのは幸いであった。アルコールが入ると英語がましになる事も発見した。

開会式はモントリオール市の招待で芸術広場で行なわれ、おいしいお昼とカナダの民族音楽がついていたとの事であるが、残念ながら私は 1 日目のホテルが気に入らず、ホテルさがしと引っこしで忙しくて出席できなかつた。科学プログラムは招待講演と合同討議、それから委員会毎に開く会議がある。予備プログラムには招待講演と合同討議の内容がのつていただけなので、お恥しい話ながら、委員会毎の会議は将来計画やビジネスの話ばかりかと思っていた。招待講演と合同討議だけだと私の興味では毎日スケジュールがうまらないので、参加をためらったのはそのせいもあるのである。ところが実際はひまどろか、体が 2 つあつたらと思う事がしばしばであった。各委員会のプログラムは掲示されるのだが、要領の悪い私は終つてから見たり、部屋の変更に気付かず、うろちょろしたり、何も予定がないので出かける約束し、その後で面白いプログラムを見つけてもみすみす聞き逃したり、そんな風で 10 日たつてしまった。講演そのものは大講義室（小さい部屋での会議もあるが私の様な浮動聴衆は確率的にそこに居る事は少い）で行なわれ、テレビ講演の様なもので、聞きとりにくい英語のせいもあって結局そんなに頭に残らないのだが、逃した講演ほど面白かったに違ひないと思つてしまふ。とは言つても前のシンポジウムと違つて話を聞くだけなので気楽なものである。

しかし気楽でない人達は大変なもので、質問の形を借りて自分の仕事を話す人が多く、議長を困らせていた。中にはこの問題に関して話す事があるから終つた後残つて聞いてくれという人もいた、掲示にない発表者が加わっている事は少しだ中で、あとあの人人は売り込みに成功したのだなと思う。そうかと思うとプログラムにあるのにその場に居合せず、お流れになるという呑気な人も一

人いた。

驚いたのは女性の研究者の多い事。開会式、閉会式で副議長をつとめたミュラー女史をはじめ、バーコール女史、ウルリッヒ女史、クナップ女史等々、講演も迫力があり、わかりやすい。私が男性と思われていたのと同様、長い間名前だけ知つていて、今回初めて女性である事がわかつた人も多い。特にフランスでは女性天文学者が多く、その比率 26% とか 40%（目標？）とか聞いた。さすがボーボワールの国である。観測など夜どおしゃらなければならない事もあるのに、子供をかかえてちゃんとやっているのには、社会条件が異なるとは言え、感服せざるを得ない。我国では女性研究者どころか、天文学者の数そのものが人口に比べて非常に少いのだから話にならない。

この文を会期中にたのまれたので、予定を変更して閉会式に出席する。前回にひきつづき中国の加盟が問題になっていた。よくある様に中国の学会の名称でもめている様で、いずれそれが片づき次第加盟するという事らしい。次期会長のインドのバップ氏が紹介された時にはびっくり。前夜の閉会招宴でとなりの席にいらした方で随分気安く好きな事（少々生意気な事も）を言ったのである（もっともそんな事は 2 回や 3 回ではなかったのだけれど）。とにかく、落着いた感じの紳士である。次回総会はスペインかギリシャになるもよう。但しスペインだと 1982 年はフットボールの国際試合か何かのせいで無理なので 1983 年になるという話であった。

カナダでは 2 分毎にエキサイトするのでとてもつき合つていられないと言つた。最後までつき合つて下さつた読者に感謝します。

### お知らせ

#### 名古屋大学理学部物理学教室助手公募

1. 職名、人数 助手 1 名
2. 所属部門 理学部物理学教室 U 研
3. 専門分野 X 線天文学
4. 着任時期 決定後なるべく早い時期
5. 任期 5 ± 2 年
6. 締切 1980 年 1 月 25 日
7. 宛先 〒464 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学理学部物理学教室  
小林ひろ美
8. 問合せ先 同上 早川幸男  
電話 052-781-5111 内線 2453
9. 提出書類 履歴書、研究歴、論文リスト、  
主要論文別刷、研究計画
10. その他 「U 研応募書類」と表記すること。